



眠れない夜に読む恋愛小説



眠れない夜に読む  
恋愛小説



銀河魁人



## 眠れない夜に読む恋愛小説

### 【推奨環境】

この E-book 上に書かれている URL はクリックできます。できない場合は最新の AdobeReader をダウンロードしてください。(無料)

<http://www.adobe.co.jp/products/acrobat/readstep2.html>

### 【著作権について】

この E-book は著作権法で保護されている著作物です。

下記の点にご注意戴きご利用下さい。

この E-book の著作権は作成者に属します。

著作権者の許可なく、この E-book の全部又は一部をいかなる手段においても複製、転載、流用、転売等することを禁じます。

この E-book の開封をもって下記の事項に同意したものとみなします。

この E-book は秘匿性が高いものであるため、著作権者の許可なく、この商材の全部又は一部をいかなる手段においても複製、転載、流用、転売等することを禁じます。

著作権等違反の行為を行った時、その他不法行為に該当する行為を行った時は、関係法規に基づき損害賠償請求を行う等、民事・刑事を問わず法的手段による解決を行う場合があります。

この E-book に書かれた情報は、作成時点での著者の見解等です。著者は事前許可を得ずに誤りの訂正、情報の最新化、見解の変更等を行う権利を有します。

この E-book の作成には万全を期しておりますが、万一誤り、不正確な情報等がありましても、著者・パートナー等の業務提携者は、一切の責任を負わないことをご了承願います。

この E-book を利用することにより生じたいかなる結果につきましても、著者・パートナー等の業務提携者は、一切の責任を負わないことをご了承願います。





## もくじ

■第1章 2008年 挫折■	.....	4
■第2章 1997年 演出■	.....	13
■第3章 2008年 浪費■	.....	21
■第4章 1997年 終演■	.....	28
■第5章 2008年 容疑■	.....	36
■第6章 1997年 進展■	.....	36
■第7章 2008年 逮捕■	.....	44
■第8章 1997年 接吻■	.....	60
■第9章 2009年 再会■	.....	69



## ■第1章 2008年 挫折■

今日も憂鬱な気分で歌舞伎町のとある雑居ビルのエレベーターに乗り込む。一日のうちでこれほど心も体も重くなる時はない。それは、真冬の朝布団から出る時よりも億劫だ。

結果は見えている。どうせ追い返されるだけなんだ。それでも、嫌々ここに通ってくるのは僕が悪かったから。僕のミスでこうなってしまったのだからしょうがない。

エレベーターの扉が開くとそこはもうフロントだ。僕より少し上背が高くスーツにメガネの店長が対応してくる。いつものようにオーナーを呼んでもらう。ここに通いだしてもう一週間だ。お互い用件はわかっている。全く話は進展しないし、結果はすでに見えている。

白い合皮のソファに座らされるとアイスコーヒーがだされ、しばらく待たされた。

「また来たのか。」

藤森オーナーはうっとうしさを隠しもせず言った。僕は頭を下げた。頼む他はない。



藤森オーナーはこの店のほかに、2店舗歌舞伎町内に持っている。この店は、"ディアレスト"。

僕はディアレストの改装工事の設計を行った。

工事予算は1200万円。キャバクラから最近流行りのガールズバーに、営業形態を変えるための改装だ。

このプランは最初から一つだけ問題があった。それは避難経路の確保だ。

2001年9月1日に歌舞伎町の雑居ビルで44人ものが亡くなるという、火災があったのを覚えている人も多いだろう。

そして、2003年2月、ビルのオーナー及びテナントの関係者など6名が消防法違反、業務上過失致死の疑いで逮捕された。

それ以降、消防庁の検査は厳しくなった。

今回のプランにあった問題は、避難階段の前にキッチンを置いたことだった。これはオーナーの強い希望であった。僕は反対したのだが、押し切られてしまったのだった。

もし、キッチンから火の手が出てしまった場合、店内の人の逃げ場がなくなる。これは消防庁の竣工検査で、必ず指摘されることだった。



消防庁の検査を受けないこともできる。ただの改装であるし届ける必要がないからだ。

届出をせず何度も改装を重ねている店舗なんて、日本にごまんとある。

しかし、今回は届出をしたい、というのも藤森オーナーの希望であった。

検査を受けるとしても、逃げ道はいくつかはあった。消防庁の検査が入る時に、キッチン内にガスレンジや給湯器などの火を使用する機器を置かないことだ。

この店は小さい店なのでそれほど大きいキッチンを必要としなかった。流しと台があるだけの家庭用の台所を想像してもらえばよい。

「ここはドリンクカウンターなので、料理はしません。」

検査の時、そう説明すると、検査官は納得して帰って行ったのだった。

次の日にはレンジと給湯器を設置して、リニューアルオープンの準備に入った。

ガールズバーにリニューアルしてから 1 ヶ月後、僕は藤森オーナーに呼び出された。その後何回もここに足を運んでいる。

「毎日毎日来ても一緒だよ。君がわるいんだから。」



今日で交渉七日目だが、まったく相手にされない。むしろ藤森オーナーは段々へそを曲げているようだ。

ディアレストのリニューアルオープンから一ヶ月後、このビルの別の階に居酒屋がオープンした。

この時もまた、消防庁の検査官が、そこを竣工検査のためにやってきた。

しかし、そのとき不幸なことがおきた。ついでに、他のテナントも抜きうちの立ち入り検査が入ったのだ。

その際に、例のキッチンの火気使用が発覚した。キッチンで火を使っていることがバレたのだ。そして、すぐに是正するように勧告されたのだった。

是正するということは、キッチンを別の場所に動かさなければならない。それには、また工事をしなければならないし、費用がかかる。

その工事費用と工事期間の営業保障及び従業員の給料を、会社に請求してきたのだ。藤森オーナーは合わせて 1000 万円もの金額を、こちらに請求してきたのであった。



とんでもない話だった。

「請負工事とは、請けて負けると書く。最後まで責任を負ってもらわなくては困るよ。」

僕は納得できないけれど、頭はあがらない。

たとえば、最悪是正工事の費用をこちらが肩代わりするとしても、営業保障や従業員の給料までもこちらで負うわけにはいかなかった。

「だいたい君はいいかげんなんだよ。」

「何度も申し上げておりますし、私は反対しましたが、今回のプランはお客様の強い希望のためどうしてもなくこういった形になったわけです。」

「なんだと！？おれのせいにするのか！？」

藤森オーナーはいまにも掴みかかってくる勢いだ。

「そういうわけではありませんが、私たちが 100%悪かったわけではないと思います。ですから、こちらで半分持ちますから、折半にしていただけませんかでしょうか。」

「……………。話にならん。帰ってください。そして何度ここに来ても同じだと、帰って社長に伝えなさい。」





僕は、ここに来るまでにある決意をしていた。プライドを捨てる決意だ。テレビドラマではよくみる光景だけれど、実際に自分がやろうと思うとなかなかできないあれだ。

ぼくは突然、膝を折り曲げ、ソファに乗っていた尻を滑らせて、足の裏の上に乗せた。正座の姿勢になった。そして、両手を床に着け、そして前頭部も勢いをつけて床に叩き付けた。

「何とかお願いします！！私たちの会社が潰れてしまいます！！！」

僕を含め5人しかいない極小企業だ。1000万円もの持ち出しをしたら簡単につぶれてしまう。

それに、昨今の不況で、業績は右肩さがりなのだ。

「・・・わかった。君がそこまでいうなら、考えなおしてみるよ。とりあえず頭を上げなさい。」

なんて言葉が返ってくるわけがなかった。世の中土下座で済むほど甘くはない。

「土下座すれば、どうにかなると思ってるのか。大間違いだよ。」



## 眠れない夜に読む恋愛小説

ある意味予想通りの応えが返ってきた。

しかし、土下座でもするしか僕に残された方法はなかった。所詮、いくら誠意をみせても、いくら頭を下げて世の中どうしようもならないことがあるんだ。それがよくわかった。

僕は社会人6年目。今年で28歳になる。建築系の大学を卒業後、小さい工務店で設計と営業を担当している。

6年も働いていると、だいぶ仕事も慣れてくる。慣れが生むのは、油断と怠慢そして傲慢。

今回の仕事についても傲慢なところがあったのだろう。客の言うとおりにやっておけば、自分の意見を無理して通すことはない。そう思っていた。

そんな、傲慢で怠慢な僕の心が今回の結果を招いたのだ。

会社に帰ると毎日社長に怒鳴られる。日々大声で社長に怒鳴られる度に、自分の心が中へ中へと向かっていくのがわかる。

鬱病というヤツに、自分がなるとは思ってなかった。それに、自殺する人の気持ちなんてわからなかった。



でも、最近は何もその人たちの仲間入りするんじゃないだろうか、と感じている。高い所や電車のホームにいと、ここから飛び降りたら楽になれるのかなとか考えてしまう。

会社に戻ると8時を過ぎていた。他の社員はもう帰ったようだ。いつものことだからあまり気にしない。

この時間でも、社長には今日のできごとを報告しなければならない。

電話すると、社長は近くの焼鳥屋で飲んでいるようだ。むしろ、この時間に社長が飲んでいない方がめずらしい。

「お前はだいたい本当に反省しているのか！！」

焼鳥屋で社長の説教が始まった。本当はこの焼鳥はとても美味しいのだ。しかし、いまは全く味覚を感じやしない。この時間はただの苦痛でしかない。

しかし、今回の件では社長も毎日頭を悩ませているのだ。それはわかるが、必要以上に僕に当たってくるのはたまらない。この不の循環はいつまで続くのか。

夜の11時近くになりやっと説教から解放された。



説教されながら、酒を飲まされてフラフラだ。

とはいえ、今日は土曜日で明日は休みだ。ようやく仕事から解放された気分心地よい。足はかかってにある店に向かってしまう。

「リナさんよろしく。」

「いつもありがとうございます。少々お待ちください。」

28歳でひとりでキャバクラなんて、なんてさみしいんだろう。でも、僕の愚痴を黙って聞いてくれるところなんって他にはない。それにカラオケも歌えるし、ここは田舎の店だから比較的安い。

しかし本当は、こんな寂しくてむなしいことを続けたくなかった。でも、僕のつらい気持ちを紛らせてくれるのはここしかなかった。

がんばって仕事で稼いだお金もこうやって無駄にキャバクラに消えていく。不の循環はこうやって続いていくんだ。

でも、この一時はそれなりに楽しいんだからそれでいいのだろう。

ぼくは、自分の人生の目標さえも失いかけていた。



## ■第2章 1997年 演出■

辛い時ほど、自分が楽しかった頃や輝いていた頃を思い出す。

17歳の冬、高校2年生の僕は来年から本格的に受験勉強を始めなければならなかった。

僕は今、演劇部としての最後の芝居に望んでいた。

公演はクリスマスイブ、僕は役者ではなくて演出だった。引退を目の前に控え、半ば強引に演出をやらせてもらった。

この時ほど自分が輝いていたと思うことはない。

「どうして、まだ決まらないんですか？」

1年後輩の阿部美香は、舞台の上で涙を流しながら問い詰めてきた。彼女の大粒の涙が2, 3滴舞台の上に落ちた。

公演があと一週間後に迫っているのに、彼女の衣装が決まっていなかった。

このとき、僕は女の子を泣かせたのは初めてだった。とても戸惑ってしまった。そして、少しばかりの罪悪感を感じた。



しかし、衣装が決まらないのにはそれなりに訳があった。舞台に立つ役者の衣装は基本的にかぶってはならない。遠くから観てる観客は、衣装の形や色で役者を判断するからだ。

美香の役柄のイメージに合う衣装で、他の役者とかぶらない色のものがなかなか見つからなかったのだ。

とはいえ、そんなことで泣かれるとは思ってもみなかった。それと同時に、涙を流すほど美香が、自分の役に思い入れがあるということにちょっとばかり感動した。

「ごめんな。もうちょっと待ってくれよな。良い衣装が見つからないんだ。」

そんな言葉しか口から出てこなかった。

僕は17歳になっても、一度も誰とも付き合ったことのなかった。そんな僕には、女の子の扱い方が良くわかっていなかった。

「今日も来てるよ。」

クラスメイトに言われ、僕は気づいた。

演出助手の新田梓(あずさ)が、今日も休み時間に、ノートを持って僕のクラスにやって来たのだ。

彼女は正直可愛い。背が小さくて笑顔がまぶしい。



## 眠れない夜に読む恋愛小説

演劇部に数いる女子の中でも、僕は彼女を一番気に入っていた。彼女は頭もよくてかわいくて人気がある。

彼女が毎日ノートを持って、他のクラスからやってくる。そんな彼女を通い妻なんて、噂にされるのも悪い気がしなかった。

「ありがとう。また、後でな。」

会話はあまりない。恥ずかしいのだ。ノートの内容は、彼女との交換日記。だったら、とても楽しいのだけれど違う。7人の役者との交換日記だ。アドバイスや励ましの言葉を、このノートに書く。そして、また役者に渡すのだ。

この交換日記は、梓の提案で始めたものだった。このノートのおかげで、毎日彼女とクラスで会えるのはとてもうれしかった。

「ササキー、CD持ってきた!？」

部活のはじまる前、1年先輩の川上結花が話しかけてきた。

結花は元部長で、大学の進学もすでに推薦で決まっている。暇なのか、よく部活に顔出して偉そうにいろいろ話してはいつの間にか帰っていく。

彼女は、容姿はよくて過去の噂も多い。要はモテるのだ。



## 眠れない夜に読む恋愛小説

けど、僕は彼女の性格はあまり好きではなかった。

先日、部活帰りに結花や梓と他何人かとカラオケに行った。その時に、僕が唄った曲を結花は気に入った。そして、そのCDを貸す約束をしたのだった。

この時はまさか、結花と付き合うことになるとは思ってもみなかった。

その時僕は、今回のクリスマス公演が終わるまではあまり余計なことは考えたくなかった。

僕の学校は、進学校で受験に影響するからと男女交際禁止であった。男女が二人きりで帰っているのを先生に見つかるだけで、職員室に呼び出しをくらった。しかもそれは、男だけだ。

でも、演劇部は男女が一緒の部活だから、否応なしにカップルは生まれていた。先輩の結花はいろんな男との噂がたくさんあった。それだけ、彼女は魅力的な人ではあった。

とにかく、クリスマス公演まで後一週間を切っていた。演劇部における僕の最後の活動に全精力をかけていた。







「ササキー、エンディングの曲どうするよ？」

舞台監督であり、音響にも精通した鈴木亮介だ。彼は中学校の頃から、演劇演劇とよく言っていた。亮介は中学のころから演劇オタクだ。彼の影響もあって僕はいまこの場所にいるのだ。

今、エンディングの曲の候補が二つあった。サスペンシブなこの芝居の最後を飾る曲をどうするかだ。

ミステリアスで暗い曲にするのか、それともファンタジックな曲でクリスマスらしさを出すのかであった。それは、この脚本をストイックに表現するか、それともクリスマス気分に合わせて明るく終わらせるかの選択でもあった。

「・・・エンヤで行こう。」

「本当にいいのか？」

「個人的には嫌だけど、クリスマスだしな。お客サンの的には盛り上がるだろ。」

僕は、後者を選んだ。エンヤのファンタジックな曲に決めたのだ。

公演後のアンケートを読むと、その曲の評判はなかなか良かった。それは後日わかったことだ。



週末に公演を控えた月曜日の練習はあっという間に終わった。帰り道は、先日舞台の上で涙を見せた美香とつきあっている細木と一緒にいた。

細い川沿いに生い茂る木々。それにそって、あまり整備されていない道がある。整備されていないとはいえ、毎日人が沢山通る道だから、障害物はあまりない。水の音や、木々のざわめきを感じながら歩ける素敵な道だ。そこが、僕たちの通学路だった。

「細木は大変だよな。」

「え、何が!？」

「おれこないだ練習中、美香に泣かれたんだけど。よく泣くのか？」

「そっか。まあな。」

細木はあまりその事について話したくはないようだった。僕と細木とは中学校からよく二人で遊びにでかけている仲だ。演劇部の中では一番付き合いが長い。

彼は、今年の夏ごろから阿部美香と付き合っている。僕より先に彼女ができて、正直うらやましかった。

「佐々木、悪いな。」



## 眠れない夜に読む恋愛小説

彼は、僕が文句を言っていると思ったのか、申し訳なさそうに言った。

それは、6月だった。梅雨に入り天気が安定しないある日の放課後。突然雨が降り出した。

部活の後の帰り道、美香が傘を持たずに、ずぶ濡れになりながら歩いていた。

僕と細木ともう一人の友人中島がそれを見つけた。そこで、僕と中島が、細木に言ったのだった。

「美香のヤツ傘持ってないみたいだぞ。かわいそうだから、細木の傘にいられてやれよ。」

細木洋介は恥ずかしがって、しばらく抵抗していた。しかし彼の優しさか、彼は傘に美香をいれて、あいあい傘をして帰って行った。

その二人の後ろ姿はいまだによく覚えている。

それがきっかけになって、細木と美香は付き合うようになったのだ。その帰り道を、今は細木と一緒に歩いていた。

「おれこそ悪いことしちゃったみたいだな。」

僕の方こそ申し訳ない気持ちだった。



## 眠れない夜に読む恋愛小説

なにせ、女の子を泣かしたのは初めてだった。僕はそれを結構気にしていた。だから、美香の彼氏の細木に謝りたかった。



## ■第3章 2008年 浪費■

「え～、もう帰っちゃうの？もっと卓也と一緒にいたいよ。」

「ああ、ごめん。おれ今日金ないんだ。」

キャバクラ嬢の甘いささやきが後ろ髪を引く。

週末はキャバクラでむなしく時を過ごす日が続いていた。もっといたいのは山々だ。けれど、本当にお金がなくなってきたていた。

キャバクラ行くために働いているのか僕は……。いつもむなしさが込み上げてくる。

彼女がいなのはもう3年くらいだろうか。しかし、3年間何も無いわけではなかった。

一週間付き合っただけで突然振られたり、体だけの関係をもったりする女は1年に2～3人現れた。

前の彼女だってすごく好きって言うわけではなかった。勢いで付き合ってしまったようなものだ。

本当に人を好きになれるのか。

本当に人から心から愛してもらうことはできるのか。自信をなくしていた。



お金だけが快樂を与えてくれた。

ある日の朝、7時前だ。いきなり携帯が鳴った。これは目覚ましのアラームの音楽じゃない。着信だった。

「みさとか・・・。」

アッシー君とかメッシー君とか昔言ったけれど、僕はおそらくメッシー君なのだろうか。むしろなんでもいうことを聞いてくれる都合のいい男だ。

「もしもし？」

「卓也？ローソンでアイス買ってきて！！」

朝の7時前から、むちゃくちゃをいつてくる広畠みさと。

「は？これから仕事行かなきゃいけないから無理だよ。ごめん」

「いいから来てよ。頭痛くてうごけないの。すごく体調悪いの！助けてよ！」

「だから、無理だって。」

「わかった。もう知らない！！」

一方的に電話をかけて来て、一方的に切られた。僕をなんだと思ってるんだ。



## 眠れない夜に読む恋愛小説

広嶋みさとと知り合ったのは、大学生の時の飲み会だ。顔が小さくて小柄で可愛かった。あるアイドル歌手に似ていて、会った瞬間に好きになっていた。

でも、未だに良い友達の域を出ない。月に一度か二度一緒に食事したりしている。知り合ってからもう6年以上経っていた。

だが、このわがままな性格を知ったら、いまさら付き合いたいとも思わない。でも、実際会うとすごくかわいいのだ。キャバクラでナンバーワンになったことがあるくらいだから。

「もしもし？今から行ったら1時間くらいかかるけど・・・。」

結局携帯をかけ直していた。自分が情けない。

「ありがとー！！」

はあ・・・。

その後すぐ、今日は現場に直行だから、用事が出来たことにして少し遅れると現場の人に連絡を入れた。



## 眠れない夜に読む恋愛小説

みさとは渋谷に住んでいた。渋谷とはいえ、駅から歩いて10分くらいの閑静なところだ。

「で、何買ってあげばいいの？」

僕は彼女の家の近くのローソンにいた。

「えーとお、おにぎりとアイスクリームと・・・。」

なんで仕事さぼって、こんなことやってるんだ。と思いつつも、みさとのために、おにぎりやアイス以外にもパンや飲み物も買っておいた。

「ちょっと！！私昨日大変だったの！！」

みさとの家に入ると彼女は勢いよく話した。おもったより元気そう  
だ。

「私、昨日道路で寝ちゃって、誰かに家まで運ばれたの！！」

そういえば、昨日の夕方のみさとから電話が入っていた。でも、めんどくさそうだからシカトしてたのだ。

「最悪の誕生日だったよー！！」

言われてみれば、昨日はみさとの誕生日だった。知り合ったばかりの頃は、彼女の気を引こうとプレゼントをあげたこともあった。







「なんで、そんなことになったの？」

みさとは、一人で代官山のバーで飲んでいたらしい。彼女はその店の店員を気にいていた。だいぶ飲んだあげくタクシーに乗った所までは覚えていたようだ。タクシーを降りたあたりで彼女は道端で寝てしまったらしい。

そして、家の近くのピザ屋さんに発見されて、自分の知らない間に家に運び込まれた。届けてくれた人は、わざわざ置手紙までして帰っていったようだ。みさとは、口早にそれを語った。

「もう、最悪！！すごい恥ずかしいんだけど。」

ってか、彼女は下着姿のままだ。本当に目に毒だ。変な気が起きかねないのに・・・僕は信用されすぎてる。

「大変だったな。でもそんなことで、わざわざ呼び出すなよ！！」

なんて言葉が言えりゃ楽なんだけど。

「そっか、とりあえず誕生日おめでとう。ほら、おにぎりとかパンとかたたくさん買って来たから、今日は家でゆっくり休みなよ。」

甘やかしてしまう。気づくと時計は9時半を過ぎていた。

「まじありがとうね。卓也」

「ああ、おれもう行かないと。仕事あるから。」



「うん。」

みさとの笑顔は本当にかわいい。ずるいと思う。

でも、これを見ると許してしまうんだ。女の演技カってこわいな。

帰りがけ、みさとは何か言いたそうな顔をしていた。でも、僕はそれも彼女の演技だと思った。あまり気にしないで彼女の家を出た。

これから仕事だと思うと本当に憂鬱だ。このまま仕事いかずに、バックれてしまえば会社を辞められる。

でも、それじゃあ負け犬だ。仕事が中途半端なままで逃げ出すことだけはしたくなかった。

それに、僕は就職してから心に決めていたことがあった。

海外への留学だ。少しずつお金を貯めようとしてるんだが、みさとにおごったりキャバクラで使ったりして消えていくのが実情だ。

でも、お金が貯まったらいまの会社を辞めて海外に行くんだ。それを支えにして仕事に向かっていた。

でも、僕はあまり強い人間ではなかった。

「すみません。渋谷のカラオケボックスが昨夜停電があったみたいで、夜中に電話があったので見て来ました。」



## 眠れない夜に読む恋愛小説

会社に一言電話をいれて現場に向かおうとした。



## ■第4章 1997年 終演■

とうとう、公演の日がやってきた。この日の為に2ヶ月間僕たちは準備してきたのだ。

幕が開いてしまうと、僕のやることはない。今日までは、役者たちに厳しく指導してきた。

今、僕のやることは彼らを励まして自信を持たせ、モチベーションを上げさせることだけだ。

一週間前に涙を見せた、後輩の美香の衣装はなんとか間に合っていた。

今日はクリスマスイブ、明日からは冬休み。だから学校はもうお祭り気分だ。

放課後の公演なのにもかかわらず、学校の講堂には500人近くの観客が集まってくれた。予想以上の人の入りで気持ちはどんどん高まってくる。

そして、舞台の幕は開いた。

役者達は大きなミスもせず、芝居は終焉へと近づいていった。





## 眠れない夜に読む恋愛小説

この幕が閉じたら僕の2年間の演劇部の活動に幕が閉じるのだ。なんだか寂しい気持ちになってくる。自分の青春が終わってしまう。そんな気がした。

最後のクライマックスの暗転。

僕はもう込み上げてくる涙を抑えることはできなかった。人前で涙を流したのは初めてだった。

僕の胸を占めるのは、切なさなのか寂しさなのか、それとも感動なのかわからなかった。

ただ、涙が溢れ出てくる。

そんな言葉しか口から出てこなかった。

僕は17歳になっても、一度も誰とも付き合ったことのなかった。そんな僕には、女の子の扱い方が良くわかっていなかった。

「今日も来てるよ。」

クラスメイトに言われ、僕は気づいた。

演出助手の新田梓(あずさ)が、今日も休み時間に、ノートを持って僕のクラスにやって来たのだ。

彼女は正直可愛い。背が小さくて笑顔がまぶしい。



## 眠れない夜に読む恋愛小説

演劇部に数いる女子の中でも、僕は彼女を一番気に入っていた。彼女は頭もよくてかわいくて人気がある。

彼女が毎日ノートを持って、他のクラスからやってくる。そんな彼女を通い妻なんて、噂にされるのも悪い気がしなかった。

「ありがとう。また、後でな。」

会話はあまりない。恥ずかしいのだ。ノートの内容は、彼女との交換日記。だったら、とても楽しいのだけれど違う。7人の役者との交換日記だ。アドバイスや励ましの言葉を、このノートに書く。そして、また役者に渡すのだ。

この交換日記は、梓の提案で始めたものだった。このノートのおかげで、毎日彼女とクラスで会えるのはとてもうれしかった。

打ち上げはお好み焼き屋だ。ここは、何かイベントがあると来る定番の店だ。

後輩の美香と彼女と付き合っている細木の姿はなかった。

他にも先に帰ったメンバーは多い。むしろ、打ち上げのメンバーの顔触れはいつも決まっていた。

25人いる演劇部の内、10人くらいしか参加していない。



「相変わらずあいつら付き合い悪いな。」

「美香は千葉の田舎から通ってるからしょうがないよ。それより、このあとみんなカラオケいくだろ??」

僕は、カラオケが好きだった。それに、打ち上げの後のカラオケはお決まりのコースだった。

「わりい、おれ今日は無理なんだ。」

「すみません先輩。先輩の最後の日なのにホントごめんなさい。私ももう帰らないと。」

次々とたたみかけられた。舞台監督の鈴木亮介も、後輩の女の子達も、みんなこの後予定があるらしい。

クリスマスイブだから、しょうがないか……。

「ササキー私は付き合っあげよ!!」

と先輩の結花だ。この流れだと結花と僕の二人きりになってしまう。

正直うれしくてちょっと心拍数があがった。でも、

「新田は行けるだろ??さすがにふたりじゃまずいし。」

僕は、演出助手の梓に聞いた。

「佐々木の最後だからね。いいよ。」



結局、僕と結花と梓の三人でカラオケに行くことになった。演劇部の中でも人気の女子二人とだ。

まさに両手に華とはこのことだった。こんな瞬間が訪れるとは思ってもみなかった。僕は、結花にも梓にも少しずつ想いがあった。少なくとも、梓のことは好きだった。

今まで僕の人生で一番ドキドキした時間だった。思い出に残るクリスマスイブとなった。

「オヤスミ★ユカ」

今日の夜も、ポケベルが鳴った。この頃の高校生は携帯なんてもっていなかった。その代り誰もが、ポケベルを持っていた。

広末涼子がドコモのCMをしていて、広末ファンも多かった。

冬休みに入ってから毎日のように先輩の結花とポケベルのやり取りが続いていた。時々電話もした。長い時は3時間くらい。でも、二人で会うようなことはなかった。

実際、彼女が僕のことをどう思っているのかはわからなかった。僕は彼女を誘う勇気がなかった。







でも、僕は確実に彼女を好きになっていた。演劇と別れを告げた僕の頭の中は、彼女でいっぱいだった。

昔僕は、結花の第一印象はあまり好きでなかった。男勝りの女という感じがしたからだ。テンション高くて、きついことツケツケいうし、わかりあえることはないと思っていた。

距離が近づいたのは、僕が演出をはじめてからだ。はじめて演出をする僕を、気にしていろいろ口出しをしてきた。

はじめはうっとうしくて、いい合いをしたこともあった。でも、そのうち語り合い、わかりあうようになった。

だからといってその時は好きにはなっていなかった。というか、何かと噂の多い彼女を好きになるのが怖かった。傷つきたくはなかった。

冬休みになると、お互い暇で電話でいろんなことを話した。普段は強気強気にみえる結花もも、時々弱さを僕に見せるようになった。

結花はもともと容姿もよかったし、僕は少しずつ彼女に惹かれていった。

年はあけてお年玉が入った。外はまだ寒いけれど、懐はあたたかくなっていたある日。僕は自転車で買い物に出かけた。



## 眠れない夜に読む恋愛小説

正月ボケのせいか、眼鏡もコンタクトもつけずに出かけてしまった。それでも、天気はいいしなんとなく見えるから気にしなかった。

その頃住んでた僕の家は、丘の上にあった。出かけるときは自転車はほとんどこがなくても、重力でかってに進んでいく。

僕は自転車で10分くらい走ったところにあるデスカウントショップに行った。

そこで、年末から狙っていた時計をお年玉で買った。そして、お金が入った勢いもあり、他にも色々物色していたらかなりの時間がたっていた。

冬の日のは入りは早い。店を出るときは夕暮れで少し暗くなりつつあった。

眼鏡もコンタクトも付けていないから、まわりがよくみえない。寒いし、早く家に帰りたかった。

行きは下り坂で楽だけど、帰りは登り坂でつらい。自転車は、大通りを走るより車の通行の少ない路地を走った方が楽だ。

だから僕は、途中まで大通りを走っていたが、途中から路地に入った。それが間違いだった。

さらに登りはきつくなった。勢いをつけて立ちこぎで行かないと、坂を登りきれない。





## 眠れない夜に読む恋愛小説

だから、十字路で右から車が来るかどうかなんて気にしていなかった。

しかも、この薄暗さの中、コンタクトなしでは、まわりがよく見えないのだ。

僕の記憶は十字路までがんばって坂を上って来たところで止まっていた。

その瞬間、自転車と僕は宙に舞った。

そして数秒後、十字路で膝を震わせて立ち尽くしている男がいた。その男は、僕を横から軽トラックで跳ね飛ばした運転手だった。

その時彼は、「人を殺した」と思った。

僕は気絶したまま近くの病院まで救急車で運ばれたそうだ。車に撥ねられたのも、救急車で搬送されたのも初体験だった。

夕日が沈んであたりが真っ暗になった頃、車輪が車体からはずれ、変に湾曲した自転車だけが、その十字路に残されていた。



## ■第5章 2008年 容疑■

「現場に行かなくていい！！一回会社に戻ってこい！！」

社長が電話にでた。

「じゃあ、現場どうするんですか？」

「他の奴行かせるから、早く会社に帰ってこい！！」

ドスの聞いた声が携帯のから響いてくる。この声を聞くだけで気分が滅入ってくる。

しょうがなく、地下鉄におりて会社に向かった。

1階に外資系のカフェがあって、その上の階はすべて事務所のオフィスビル。ここの6人乗りの小さいエレベーターに乗り込み、6階で降りると僕の働く会社はある。

事務所には同僚が一人と事務員と社長、そして見たことのないスーツ姿の男が二人いた。

「お前朝から何やってるんだ！？本当に渋谷のカラオケに様子見に行ってきたのか??」

「はい。昨日停電があったみたいで、原因はよくわからないんですけど・・・。」



「原因がわからないなら、何のためにいつてきたんだ！？それより、大変なことになった。」

藤森オーナーが今朝殺された。お前疑われてるぞ。刑事さんがお前に聞きたいことがあるそうだ。」

「こんにちは。佐々木卓也さんですね？」

二人組の刑事。一人は、50代後半くらいで少しおでこが後退気味の愛想のないオヤジ。もう一人は20代半ばくらいの若い青年だった。背が高くガタイが良いが、愛想はよかった。話しかけてきたのは青年の方だ。

「そうですけど、何があったんですか？」

冷静に受け答えていた。ぼくはいわゆる刑事さんというのを見るのは初めてだった。内心すごくドキドキしていた。オヤジの方の刑事は厳しい眼で僕を射抜いてきた。心の奥底まで見抜いてやろうという眼だ。

「申し遅れました。私は渋谷神南署の井上といいます。こちらは警部の山崎です。まあ、座ってください。それとも、ここじゃ話しづらいですか？」

「いえ、別にかまわないですよ。」

社長室に、黒い革の長いソファが二つあった。上座に僕と社長が座り、向かい合わせに刑事の山崎と井上が座った。



## 眠れない夜に読む恋愛小説

「川田社長には、先ほど簡単にお話ししたんですが……。

さきほど、藤森忠さんが渋谷の自宅マンションで刺殺されているのが発見されました。犯行時刻は午前 8 時頃です。その時間佐々木さんは何処にいらっしゃいました。」

「刑事さんは私を疑っているわけですね。」

その時刻は、みさとの家の近くのローソンで買い物をしてた頃だ。しかし、社長には渋谷のカラオケボックスのチェックにいったことになっている。本当のことを話したら、僕が嘘をついていたことが社長にバレル。どうするか……。

「渋谷の鶯谷のローソンにいました。買い物をしてました。」

「ローソンに。その後はどうされたんですか。」

質問はすべて若い刑事がしていた。初老の刑事は僕をずっとにらみっぱなしだ。

「その後は、渋谷のカラオケボックスにいつてきました。昨夜停電があったそうなので、そのための調査です。」

「それを証明できる人はいますか。」

「……。いないですね。」



## 眠れない夜に読む恋愛小説

僕は結局嘘をついてしまった。しかし、こんな嘘は刑事が調べたら簡単にわかることだった。でも、僕は本当に殺していない。

「どうして私を疑っているんですか？」

「お店の従業員さんが、あなたが毎日藤森さんの店にきて土下座されたりしているのを見ていたらしくてね。だいぶもめてたらしいじゃないですか。」

「確かに、私は毎日藤森オーナーの所に訪れていました。酷いこともいわれたし、それで悩んでもいました。でも、殺したりしてません。」

「刑事さん、うちの佐々木は人を殺せるような度胸はないですよ。」

社長がめずらしく僕をフォローしてくれた。会社から殺人犯がでたら、悪いうわさがたつからであろう。

「そうですか。わかりました。とりあえずは、あなた達の言うことを信じましょう。何かわかりましたら、こちらへ連絡をもらえますか。」

刑事たちはあまりつつこんで質問をしてこなかった。電話番号を書いた紙をテーブルに置くと、あっさりと帰っていった。

僕の頭の中は真っ白になっていた。僕は何もしていないのにどうしてこうなるんだろう。





でも、藤森オーナーがいなくなったことは正直なところ、すこしばかり嬉しかった。

「刑事の井上さんですか？佐々木卓也です。」

僕は昼休みの時間を使って、刑事に電話をかけていた。さっきの発言を訂正するためだ。

「刑事さん。さっき私は嘘をつきました。今朝私はカラオケボックスには行っていません。友人の家に行きました。・・・名前ですか？広嶋みさとです。渋谷の鶯谷に住んでいます。携帯の番号わかるんでかけてもらえば、確認できると思います。このことは社長には黙っておいてもらえますか。」

社長の前では、嘘をついていたことを説明した。

それにしても、僕は本当にせこい人間だ。社長についた嘘を守るためさっきは本当のことを言えなかった。

それにしても、藤森オーナーを殺したのは誰なんだろう。

僕は仕事上での付き合い以外は彼のことは知らなかった。知り合ったのはみさとの紹介だ。彼女の働いているキャバクラのオーナーだった。





藤森オーナーはキャバクラ以外にも風俗店も経営しているという噂があった。

しかし、彼とはそういう話をしたことはなかった。もともと、彼は名古屋の人間だ。歌舞伎町に出てきたのはここ3年くらいらしい。名古屋に風俗店があるのかもしれない。

「佐々木も大変なことにまきこまれたな。」

今日は久しぶりに同僚の木島と近くの居酒屋に来ていた。

彼とはこの会社に入ってから6年来の付き合いだ。木島は年上だが、ほぼ同期であるからタメの付き合いができた。しかも彼は年より若く見えた。上司からの圧力が強い分、同僚どうしの絆は強かった。

「本当に殺してないだろ？」

「バカ。こんなところでなんてこと言うんだ。おれはそんなことしないよ。

確かに藤森さんは嫌いだったけどね。」

「冗談だよ。そんなムキになるなよ。子供か。」

「ってか、これからどうなるんだろうおれ。今日はいんまり訊かれなかったけど、オヤジの刑事はおれをすごい眼で睨んでた。」



## 眠れない夜に読む恋愛小説

「いいじゃん。やってないんだろ。あまり気にすることはねえよ。それに、藤森さんいなくなっておまえにとっては良かったじゃねえか。」

木島は、おれが今回の件でだいぶまいっていることを知っていた。でも、彼も忙しくてあまり二人きりで話すということにはなかった。

「そりゃそうだけど、まだ最初の工事の集金おわってねえし。問題山積みだよ。」

「まあなんとかなるって！それよりこの後どうするよ。行くだろ！？」

「は一、ひとごとだな。てか、お前酔ってるよな。めんどくさ。」

お互いもうすでに、ビールと焼酎合わせて10杯近く飲んでいて。嫌なことがあった時ほど、酒は体に入っていく。僕たちはそのあと、いつも二人でよくいくキャバクラに向かった。

僕はそのときかなり酔っていて、そのキャバクラでどういう話をしたかよく覚えていない。ただすごく楽しかったのだけはなんとなく覚えていた。

そして、そのあとその店のトイレで吐きまくった。すごく気持ち悪かった。こんなに気持ち悪いなら死にたいと思った。むしろ僕を殺してくれればよかったのと思った。



## 眠れない夜に読む恋愛小説

明日は仕事もしたくない、なにもしたくない。僕はこの日は結局家に帰れなかった。木島が帰った後、一人で個室観賞の店に入った。選ばされたDVDをロクに観ることなく、リクライニングソファの上で爆睡してしまった。

その間、何回も刑事の井上から着信が入っていた。僕は全く気づいていなかった。



## ■第6章 1997年 進展■

眼を開けると、明るい蛍光灯の光がまぶしかった。知らない顔が二つ僕を覗き込んでいる。ぼくは今どこにいるのか、どういう状態になっているのか全く理解できないでいた。ただ、知らない人達に覗かれているのがすごく恥ずかしかった。

「まだ、起き上がらないでください。」

起き上がろうとしたら、白い服を着た女の人に制された。なんとなく、現状がつかめてきた。僕はどうやら病院にいるらしかった。

言われた通り横になり目を閉じると、右からトラックが飛び出してきた光景が、フラッシュバックのようによみがえってきた。そうか、僕は車に撥ねられたんだ。

そして、いつの間にか僕はまた眠りについていた。

次目覚めた時は、病室のベットだった。僕は、起き上がって普通に歩くことができた。首が少し痛いだけで、特に体に異常は感じられなかった。信じられないことだが、僕は軽いむち打ちをしただけであった。それでも、事故のあった夕方から次の昼くらいまでは寝ていたらしい。なんだか不思議な気分だった。



## 眠れない夜に読む恋愛小説

僕はどうして助かったんだろう。脳検査も異常なかったらしく、今日一日安静にして、明日の朝には退院できるそうだ。

しかし、ちょっと困ったことが一つあった。眼鏡もコンタクトもないから、生活しづらいことだ。

そんなことは、周りの反応に比べたらたいしたことじゃなかった。目を覚ましたときは母親はいなかった。しかし、母は僕が寝ている間はとても心配していたらしい。看護婦さんが言っていた。

それともう一人、僕のことを心配している人がいた。結花だ。僕からポケベルが来ないから、昨夜家に電話したそうだ。そして、母が電話に出て僕のことを聞いたらしい。結花から何件もメッセージが入っていて僕はうれしかった。

とりあえず、病院の電話から結花にポケベルをうった。それが、僕が目覚めて最初にしたことだった。

冬休みが終わり、3学期が始まった。僕は新学期早々、首にコルセットをつけて登校した。これをつけていると、まるでロボットのように少し恥ずかしかった。だが、ちょっとした話のネタにはなった。





## 眠れない夜に読む恋愛小説

先月引退したぼくは、今日から部活に行く必要がなかった。それを今は寂しく感じた。受験勉強といえど、あと一年後のためにいまから猛勉強できるほど、僕は勉強が好きではなかった。なんだか、なんのために部活を辞めたのかわからなかった。

だが、今日は大きな楽しみが一つあった。結花に会えることだ。

冬休みは結局、結花に会うことはなかった。事故の後も、毎日ポケベルを送っていたし、時々電話をしていた。

そして、明日会えるのが楽しみだ、という会話を昨日して電話を切った。

昼休み、部室に行くと結花がいた。結花の態度は以前と変わらない。僕たちは先輩と後輩だ。でも、二人でいるときの空気感が少し変わってきているって感じた。

「うわ、なにそれ！？ コルセット??」

「うん、例の。かっこ悪いでしょ。」

「でも、無事で本当によかったよ。」

いままで、結花がこんな表情で僕と接したことあるだろうか。そして彼女は続けた。

「今日帰りに久しぶりにカラオケ行かない？」



向こうから、誘ってくるとは思わなかったから、気持ちが高なった。うれしかった。

「いいね。おれも最近カラオケ行ってないから。」

「そっか、よかった。実は浩次に誘われてて、二人じゃちょっとあれだと思ってたから。」

あれって、なんだよ。てか、ふたりきりじゃないのか。残念だが、結花は浩次と二人きりで行くことを選ばなかった。その残念さと嬉しさとがまじりあって、微妙な気持になった。

僕と若杉浩次とは、今年の夏一緒にバンドを組んだ仲だった。僕はヴォーカルで彼はベースだった。一回きりのバンドだった。他のメンバーとはあまり気が合わなかったが、浩次とは気があった。

そのつながりで彼は時々演劇部に顔を出すようになり、小道具をつくったりするようになった。浩次は背は低いけれど、綺麗な顔立ちだった。彼の容姿は正直羨ましかった。ただ、性格は少し問題はあった。けれど、逆にそれが手のかかる弟のようで気になってしまうのだ。



## 眠れない夜に読む恋愛小説

しかし、浩次が結花と連絡取っているとは全然しらなかった。それに、彼には彼女がいたはずだった。

なんだか、結花との関係を進展させる自信がなくなって来た。もともと、僕は今まで誰ともつきあったことがないんだ。

「あれ、今日は結花先輩と佐々木だけ？」

梓が部室に入って来た。僕はなんだかバツが悪かった。別に男女二人で部室にいることは珍しいことではなかった。

ただ、ついこないだまで僕は、結花よりも梓のことが好きだった。だから、なんだか勝手に申し訳ない気持ちになっていた。

「おれたち、部活ないし暇だからね。」

僕は乾いた返事をした。

放課後、僕と結花と浩次の3人でカラオケに行った。浩次がいたとはいえ、久々のカラオケは楽しかった。カラオケの後はマックに行った。だいたいお決まりのコースだ。







## 眠れない夜に読む恋愛小説

そこで、僕は気づいた。浩次の帰る方向は、僕と結花とは逆方向だ。彼は上りの電車に乗るのに対して、僕と結花は下りの電車で途中まで一緒だ。二人きりになれるチャンスだった。

だが、結花を好きだけれども、僕はすぐ告白しようとか思っていなかった。だいたい、これからどうしていったらいいのかさえわからなかった。

浩次と別れ、二人で電車に乗っている時、彼女は言った。

「駅まで送ってくれるでしょ？」

完全に彼女ペースだ。ていうか、僕はへたれだ。僕から

「駅までおくるよ。」

と言うべきだったのだ。彼女の降りる駅は僕の最寄駅よりさらに3駅下ったところだった。

駅から出るとまっすぐに続いている商店街。それを目的もなくただ二人で歩いていた。僕は彼女と二人でいられることがうれしかった。それだけでよかった。きっと結花もそう思っているだろう。そういう雰囲気だった。

商店街をいったりきたり2往復くらいすると、夜10時を過ぎていた。彼女の家にも門限がないとはいえ、さすがに帰らなくてはならなかった。

「今日はありがとう。たのしかった。」



「おれ・・・。」

好きだ。という言葉が喉まで出かかっていた。でも、言葉を必要としないような顔で、彼女は僕を見つめていた。

そして二人の距離がだんだん近づいてきた。僕も彼女の大きな瞳を見つめていた。街灯に照らされた彼女の顔は、普段より大人びて見えた。

そして次の瞬間、彼女は僕の背中に腕をまわし、身体を預けてきた。

僕は、突然のできごとで、言葉を発することもできずにいた。ただ、胸で結花を受け止めて、抱きしめ返すことしかできなかった。

でも、今はそれでよかった。ただ、僕の胸の鼓動の高鳴りが、結花に伝わるのではないかと思うほど、大きくなっていた。静かに時間は流れ、無言のまましばらく抱き合っていた。

気づくと彼女は泣いていた。僕は気のきいた言葉の一つも出てこなかった。そういえば、これで女の子を泣かせたの二人目だ。そんなことが、頭に浮かんでしまった。

「また、明日な。」

「うん、じゃあね。」

結局お互い言葉で確かめ合うことはなかった。





## 眠れない夜に読む恋愛小説

でも確実に二人の距離が近づいたことを感じていた。



## ■第7章 2008年 逮捕■

「え、本当ですか！？みさとが……。」

僕は朝目覚めると、井上刑事からの着信がたくさん入っていることに気付いた。それにしても、頭が割れるように痛い。胸やけもひどい。そういえば昨夜死ぬほど吐いたことを思い出した。こういう時は二度と酒は飲むまいと思う。

気は進まなかったが、刑事の井上に電話した。

彼は驚くべきことを口にした。広嶋みさとが逮捕されたというのだ。僕は耳を疑った。なぜなら、犯行時刻の昨日の朝8時過ぎに、ぼくは彼女と会っているのだ。それに少なくとも、彼女は嘘を言っているようには思えなかった。

しかし、彼女がヒステリックな性格であることは知っていた。彼女が怒ったときは、手を出すということも知っていた。だが、人を殺すような人間だとは思えなかった。

「広嶋みさとに関して、あなたに伺いたいことがあります。至急神南署まできてもらえますか。あなたが、昨夜から渋谷にいるのはわかっていますよ。」





確かに僕は、昨夜からすでに渋谷に来ていた。木島と一緒にいったキャバクラは渋谷にあったからだ。とにかく、神南署に行って真相を確かめねばならなかった。それに、僕に聞きたいこととはなんなのだろうか。

「ああ、佐々木さん。昨日から何回もお電話したんですよ。」

「すみません。ちょっと飲んでまして。ところで、どうしてみさとが逮捕されたんですか？」

「質問をするのは私ですよ。佐々木さん。とりあえず、こちらに来てもらえますか。」

井上刑事は、昨日のような愛想はなかった。僕は、この時あまり気を抜いては行けないと思った。彼は僕から何かを引き出そうとしているようだ。

私は、個室に連れて行かれた。そこには、昨日井上と一緒に来たハゲオヤジの刑事がいた。

「昨夜、殺人の容疑で広畠みさとを逮捕しました。あなたは、昨日の朝彼女と一緒にだったんですね？彼女から何か聞いていませんでしたか？」

この時、はじめてハゲオヤジの声を聞いた。

「はい。確かに、私は昨日の朝、彼女の家に行きました。朝の7時前にみさとから電話があったんです。飲みすぎて頭が痛いから、買い物してきてほ



しいということでした。私は、仕事があるからと、一度断ったのですが、彼女にどうしてもと頼まれて行きました。」

「わざわざ1時間かけてですか？あなたは彼女とはどういう関係だったんですか？」

「ただの友達です。でも、藤森オーナーを紹介してくれたのは彼女でした。」

刑事は少しの間黙って、僕の眼を睨みつけてきた。

「広畠みさとは、藤森忠の愛人でした。あなたは知っていましたか？」

「・・・。」

まったく知らなかった。

「知りませんでした。」

「そうですか。それなら、あなたは少しショックを受けたのじゃないですか？」

さすが刑事だけあって、いいずらいことをずけずけと言ってくる。

僕は、黙っていた。

「あなたが、昨日広畠みさとと会った時、どういう話をしましたか？覚えていたことをできるだけ話してもらえますか？」



ハゲオヤジの刑事は、言葉づかいは丁寧だが、有無を言わさない雰囲気だ。

「彼女は、おととい誕生日でした。彼女は、一人で代官山で飲んでいました。そこで、飲みすぎてしまい、帰り道で寝てしまった。その後、誰かに家まで連れて来てもらったそうです。とにかく、飲みすぎて気持ち悪い、頭が痛いと言っていました。」

僕が話し終わると、しばらく沈黙が続いた。

「ふふふ。」

刑事が含み笑いをした。

「佐々木さん。あなたは嘘をついていませんよね？でなければ・・・。」

ハゲオヤジは半笑いしながら、言葉を続けた。

「あなたは、広畠みさとにずいぶん騙されていますよ。あなたは、彼女のことが好きだったんですね。でなければ、人間はそんなに人を信用することはできない。」

たしかに、彼女を想ったことは一時あった。しかし、今はただの友達としか思っていなかった。僕はなにも応えず、刑事の話の続きを聞いた。



「おとといの夜、確かに彼女は一人で代官山のイタリアンバーで飲んでいました。」

なんだよ。騙されちゃいないじゃないか。

「しかし、9時くらいになるとそこに男が現れた。そして、10時くらいには一緒に店を出て行ったそうさ。その男が藤森忠だ。店の従業員が顔を覚えていた。それによく二人で来るようだ。」

じゃあ、彼女は藤森と朝まで一緒だったってことか。愛人なら当然のことだろう。その話しが本当なら、みさとが疑われるのはしょうがない。

「でも、藤森さんは結婚なされてたんじゃ・・・？」

「ああ、確かに娘がいる。しかし、彼はすでに離婚して渋谷のマンションで一人で暮らしていた。」

「それじゃあ、愛人っていう言い方は、おかしいんじゃないんですか？」

「佐々木さん。あなたはぜひぶん広畠の肩をもちたがるね。確かに、愛人といういい方は少し違うかもしれない。しかし、藤森オーナーが目をかけていた女性は広畠だけではないんだ。他に少なくとも3人はいる。みんな彼の店の女の子だ。」

なんだか、話についていけない。僕は、頭がだんだん痛くなってきた。





「とにかく、あなたは容疑者が犯行後に最初にあった人物なんだ。」

「みさとはなんて言っているんですか？犯行を認めているんですか？」

「あなたが言ったことと同じことを言っているよ。しかしあの夜、藤森と一緒にいたのを目撃され、朝方も彼のマンションから出てくるのを、マンションの住人に目撃されているんだ。今一番の容疑者は広畠みさとだよ。」

井上刑事は、昨日の夜から僕が渋谷にいることを知っていた。会社を出てからずっとつけられていたってわけだ。僕を共犯者にしたいらしい。

「僕をまだ疑っているわけですね。そうだ、凶器の指紋とかあったんですか？」

「ずいぶんとむきになっているじゃないか。佐々木さん。凶器はまだ発見されていない。藤森のマンションから検出された指紋は、広畠みさとと吉原昭三のものだけだ。吉原はクラブエンドレスの店長だ。」

「じゃあ、その吉原があやしいじゃないんですか？」

ぼくは、冷静でいられなかった。とにかくなにか話していないと、疑いが晴れなそうで不安であった。

「吉原にはアリバイがある。」

刑事はめんどくさそうにいった。しかし、



「残念ながら、私たちはあなたを逮捕できる物的証拠があるわけじゃない。今日は帰ってくれてかまわないよ。」

と、本当に残念そうに続けた。なんだか、狐につままれたような感じだった。みさとと会って話したかった。でも、それは許されなかった。

その後会社に行っても、仕事が全く手に付かなかった。もはや、社長は何も僕に言わなかった。

よくよく考えてみると、刑事の言っていたことは、なんだかしっくりこなかった。

僕は、みさとが金使いが荒いのは知っていたが、借金で困っているなんてことは聞いたことがなかった。

それに、僕はみさとに面会する権利はあったはずだった。それなのに許されなかった。まるで、刑事の方が僕に嘘をついているようだ。なにかを隠している気がする。

ただ、彼女と藤森オーナーと何かある。それは、本当だろう。一介のキャバクラ嬢の紹介で、無名の人間に店の改装を任せるなんてことは、まずありえないことだからだ。

考えれば、考えるほどわからなくなってくる。





## 眠れない夜に読む恋愛小説

「おい！佐々木！！聞いているのか！？」

「はい！すみません。考え事してました。」

「佐々木。もう今日は帰れ！！・・・そして、しばらく会社にはこなくていい。お前がいるといろいろな迷惑だ。」

本当に、はっきりとものを言う社長だ。しかし、彼の言うとおりに。いまの僕は、使い物にならない。

もはや、生きていても何の意味もないんじゃないか。そんな思いが、常に付きまとっていた。



## ■第8章 1997年 接吻■

3学期は短い。この時ほど、3学期の短さを嘆いたときはなかった。2月に入ると、卒業式は目の前だ。

卒業式が来ると、それ以降結花とは学校で会えなくなってしまう。

あの日から、二人の距離は確実に近づいていた。放課後、僕と結花はときどき一緒に出かけるようになった。

けれども僕は結花に、一度も付き合おうとは言ってなかった。というか、そういうことを言わないうちに二人の仲は進展していた。

まだ冷たい風が吹く2月。月明かりの元、歩道橋の上、僕は線路を見下ろしていた。隣には結花がいた。

それは彼女と二人きりで会う、4回目の夜だった。

「もう少し早く、先輩を好きになっていればよかった。」

「なんで？」

僕は、彼女の顔を見ることができなかった。

「なんでって。もうすぐ先輩卒業するだろ。卒業したら、こうやって簡単にあえなくなるじゃん。それに、おれはそろそろ受験勉強に本腰をいれないと・・・」





ガタンゴトンと電車が歩道橋の下を通過した。その音で、僕は話すのをやめた。

電車が通り過ぎると彼女が口を開いた。

「私たちって付き合っているわけ？」

「おれは、先輩のことが好きだよ。」

「それは何回も聞いている。でも、ちゃんと言ってくれたことないじゃん。付き合おうって。」

そうだ。僕は肝心なことが言えてなかった。お互い好きなんだから、それでいいと思っていた。

「私、卒業するまで、もう誰とも付き合わないって決めてたんだ。」

「えっ？」

僕は、左にいる彼女に顔を向けた。しかし、彼女は通り過ぎていった電車の方を見つめていた。

そんな……。なんだか彼女に振り回されてるような気がしてきた。

僕は、なんて言っているかわからなかった。ただ、彼女の横顔を見つめていた。



## 眠れない夜に読む恋愛小説

その次の瞬間だった。彼女は突然、こっちを向くと顔を近づけてきた。

僕は眼を見開いたままだった。彼女は眼を閉じていた。

そのまま、彼女の唇は、僕の唇と重なった。

僕は、心のなかでアツと思った。

僕は、遅れて眼を閉じた。眼を閉じると、全神経は唇だけに集中しているようだった。彼女の唇は柔らかくて温かかった。しばらくそのぬくもりを感じていた。

ガタンゴトンとまた電車が近づいてきた。その音に反応するように、二人は唇を離した。17歳の冬、僕は初めてのキスをした。

いつも、彼女にリードされてばかりだった。

「私、もう子供じゃないよ。いいの？」

キスが終わった後、彼女はいった。

最初はどういう意味か僕は理解できないでいた。キスした嬉しさで心がときめいたいたからだ。

でも、彼女の申し訳なさそうな顔を見て、僕は意味を理解した。なんとなくわかっていたことだけど、そうやって言葉に出されると、ショックをうけた。



## 眠れない夜に読む恋愛小説

僕なんて、いま初めてキスをしたばかりなんだ。一歳しかかわらないのに、彼女がすごい年上のような気がした。

「佐々木ってかわいいよね。」

はぐらかすように彼女は言った。

「なあ、今日からは卓也って呼んでくれないかな。」

「・・・そうだね。じゃあ私のことはなんて呼んでくれるの？」

「ユカ。」

彼女は、満足そうな顔をした。

その顔に、今度は僕からキスをした。

また、電車は僕たち二人が立つ歩道橋の下を通過していく。17歳の僕はこれ以上ない幸せを感じていた。

そして、あっという間に卒業式の日は過ぎて行った。切ない春が近づいて来ていた。

なぜだろう。僕は誰にも言っていないのに、僕と結花が付き合っていることを、演劇部のみんなはいつの間にか知っていた。

女の口を伝わると、なんて早く噂は伝わるのだろうか。





## 眠れない夜に読む恋愛小説

しかし、問題はなかった。彼女はもう卒業してしまった。僕は演劇部を引退した身だ。彼らに迷惑がかかることはない。

僕が演劇部を引退した後、演劇部内では大きな革命が起きていた。

というのは大げさかもしれないが、今までにない配役がされたのだった。

次の芝居の日は、3月末に行う市民会館での公演だった。そして、その後の新入生歓迎公演。この芝居の出来次第で、来年度の新入生の入部の数は決まってくる。

今回の演出は細木洋介。舞台監督は阿部美香。

この二人は、付き合っている。みんな周知の事実だった。

僕が結花に夢中になっている間に、演劇部の現役のメンバーは、毎日稽古に取り組んでいた。

しかし問題があった。それは演出と舞台監督だ。

演出の細木洋介は、僕の中学校からの友人。

舞台監督の阿部美香は、前の公演の練習中僕の前で涙を流した後輩だ。

何度もいうが、彼らは夏ぐらいから付き合っている。

事件は、公演間近の合宿の日に起こった。





## 眠れない夜に読む恋愛小説

それは合宿 2 日目の夜、演出の細木洋介はいままでになく落ち込んでいた。

その原因は、みんな知っていた。

昼間の練習中に、彼は美香を殴ったのだ。

それには訳があった。

演劇部の部活はいつも学校の講堂でしていた。

講堂内の舞台の下手の方には、避難扉があった。そこを出ると坂になっている。そこを、演劇部員はスロープと呼んでいた。

そこでのできごとだった。。

阿部美香は、普段は明るくて元気がよい。彼女がいるとその場が明るくなるという魅力があった。

しかし、彼女の内面は感受性が強く繊細であった。そして、他人に感情移入しやすい優しい子なのだ。

講堂脇のスロープは、春の訪れを感じさせる生暖かい風が吹いていた。

その風は、美香の少し茶色がかった髪をなびかせていた。風に吹かれた彼女の髪が、今にも届きそうな距離にもう一人立っていた。



## 眠れない夜に読む恋愛小説

美香と一緒にいたのは、美香の彼氏の細木洋介ではなかった。今回の芝居では音響と脚本編集を担当していた鈴木亮介だった。

僕は最近の演劇部の人間関係を、よく把握していなかった。

後から聞いた話だが、その時の亮介は演劇部のあるメンバーから振られたばかりだった。

彼はそれが原因で、やる気をなくしていた。落ち込んでいた。部活を休んだり、遅れて来ることが増えていた。

そんな彼を、美香は励ますつもりで二人で話していたようだ。美香は、舞台監督という全体をまとめる仕事についていたため、みんなの足並みを乱したくなかったのだ。

しかし、思わぬ展開になった。

「細木先輩。私ができることなら何でもしますから、元気出して下さい。」

亮介はうつむいて黙っている。ただ、春を告げる風の音だけが響く。

「先輩……。」

美香は、亮介に問いかける。彼女は、使命感を持って彼と話していた。



## 眠れない夜に読む恋愛小説

「何でもってなんだよ！？お前にはおれの気持ちがわかるわけがねえ！

おれは、部活であいつの顔を見るだけでつらいんだ。」

亮介はもちろん未練があった。別れた彼女と毎日部活で会わなければならぬのは辛かった。

亮介は、美香にその気持ちを吐きだした。そして、今度黙りこむのは、美香の番だった。

「ほら、何もできねえじゃねえか！！」

「そんなことはないです！！」

その時、演出の細木洋介は美香を探していた。彼女と打ち合わせしたいことがあったからだ。

そして、スロープに出る扉に手をかけた。

「ほんとに何でもできるのかよ！？」

亮介の感情の昂ぶりが移ったのか、美香は涙を流していた。

しかし、亮介はそれに動じることなく、ただ彼女を睨みつけている。

「はい！ できます！！」





「じゃあ、これは！」

亮介は言うと同時に、強引に美香を引き寄せた。そして彼女の唇を奪った。

突然の出来事に、美香はそのまま身をゆだねてしまった。

その時だった。

講堂からスロープへ出る扉が開いた。

出てきたのは、細木洋介だった。

彼は、その瞬間眼に飛び込んできたものを、すぐに理解できなかった。

しかし、その映像だけは彼の脳に深く刻みこまれた。

かれは、しばらく動けず、ただその二人の姿を見つめていた。



## ■第9章 2009年 再会■

「そんなことありましたね〜。」

美香は、僕が勧めた焼酎の緑茶割を飲みながら上機嫌だ。

「でも、細木先輩私をひっぱたいたんですよ。なんで私だけ殴って、亮介先輩を殴らなかったんですかね。おかしくないですか？」

「そうだよな。」

美香は、その時のことを明るく話す。まるで今は、あまり気にしていないようだ。

それはそうだろう。あの時から、もう10年以上経っているのだ。

僕は、10年ぶりに美香と会い。二人きりで居酒屋に来ていた。

最近流行りのソーシャルネットワーキングサービス（いわゆるSNS）を通して、僕は最近美香と連絡を取るようになっていた。

僕は日頃のストレスを、SNSの日記に書くことで、少し発散していた。

日記を書くと友人がコメントをくれた。それは、僕の生きる励みになった。美香も時々コメントをしてくれた。

SNSで阿部美香と知り合ったのは1年くらい前だ。



しかし、実際に最後に会ったのは高校の卒業式が最後だ。それ以来美香に会ったことはなかった。

だから、今日は10年ぶりの再会だ。

先日、僕が書いた日記をきっかけに、美香と会うことになった。

美香との思い出はそんなに多くはない。

僕が演出をしていた時に、彼女に泣かれた。実際具体的に覚えているのはその程度だ。

それでも、同じ部活の後輩だし、感情的には妹みたいなものだ。

待ち合わせは、新宿駅の東口交番前だった。

ここは、新宿でも待ち合わせの定番の場所だ。これからデートに行く人や、飲み会に行く人が沢山待っている。

8時の待ち合わせに僕は少し遅れてきた。

後輩とはいえ10年ぶりに美香に会うのに緊張していた。早く着いて待っているのが嫌だった。

しかし遅れてきても、緊張は変わらなかった。胸がドキドキしていた。

「あー！先輩！！」

「おう、阿部じゃん！・・・かわってねえな。」



## 眠れない夜に読む恋愛小説

彼女の元気な雰囲気は僕の緊張感をすっ飛ばされた。

「え～、かわってませんかあ？」

彼女は、久しぶりにあったというのに、物おしせず上目づかいで話してくる。

「う～ん。でも、綺麗になったかもな。」

「やったあ！」

彼女は無邪気にガッツポーズをした。なんだか、かわいらしかった。

そして、僕たちは居酒屋に来て二人で飲んでいた。

ストレスが溜まっている僕は、いつものようにお酒をどんどん身体に流しこんでしまう。

でも、今日は本当に気分が良かった。

キャバクラ嬢意外と二人きりで飲むのは久しぶりだ。いや、みさととはたまにこうして二人で飲んだ。

でも、いまだ彼女は留置所の中だ。

「あのさ、気になってたことあったんだけど、結局細木とはいつまで付き合ってたの??」

「え～。やっぱり聞きたいですか？」





「おう、教えてよ。」

「たしか、私が3年になった時の6月です。」

美香が高校3年だったってことは、おれと細木洋介は大学1年の時だ。

細木とは別の大学に行ったから、卒業してからあまり会うことはなかった。

「でも、細木先輩別れる時、酷かったんですよ。私が、別れたいっていったらなんて言ったと思います？」

「わからん。」

「・・・じゃあ最後にやらせろって言ったんですよ。ひどくないですか？」

美香は、僕が酒を飲ませたのもあって、結構酔っているようだ。顔が赤い。でも、そんな顔を赤くして笑うのもかわいらしかった。

「そりゃひでーな。」

「しかも、そういいながらスカートめくってきたんです。だから、わたしサイテーって言ったの覚えています。」

高校生の美香が、スカートをめくられるのを少し想像してしまった。僕もだいぶ酔っていた。

「はははっ」





## 眠れない夜に読む恋愛小説

10年というお互いに重なっていない時間は、あまりにも長く。話は盛り上がり、尽きることはなかった。

久しぶりに会ったというのに、10年前に戻ったような気分で美香と話していた。

「ところで、美香は今付き合ってる人いるんだよね？」

楽しそうに話していた美香が、急に元気がなくなった。まずいことを訊いてしまったのか。

「はい。いるんですけど・・・。」

「ですけど??」

「あんまりうまく行ってないんです。半年前一回わかれたんですけど、職場が一緒だから気まずくなっちゃって・・・。2ヶ月くらい前からまた付き合ってるんです。」

「そうなんだ。確かに職場が一緒だと気まずいよな。」

「そうなんです。それに、最近会うたびに喧嘩ばかりしてるんです。」

「別れればいいのに。」

「みんなにそう言われます。でも、また職場で気まずくなるのが嫌なんです。」





## 眠れない夜に読む恋愛小説

美香はうなだれてそう話した。僕はなんて励ましていいかすぐ言葉が出てこなかった。

「そうだっ！！この後カラオケでも行かねえ！？カラオケ行ってすっきりしようぜ。」

僕は思い切って、美香をカラオケに誘った。

元気のない彼女に何かしてあげたかったし、美香とこのあともずっと一緒にいたいと思った。

「・・・いいですよ。私も最近カラオケ行ってないで。」

僕は内心ガッツポーズをとった。

「よっしゃ決まりな！」

僕は笑顔で言った。美香もそれに笑顔で応えてくれた。なんだか、胸が高鳴りだした。誰かにドキドキするなんてずっと忘れていた感情だった。

東京の夏は、例年蒸し暑い夜が続いている。

居酒屋を出ると、生ぬるい風が肌を掠めた。時間は10時を過ぎていた。これから、カラオケ行ったら終電過ぎるかもしれない。

それは、それでいいかも。なんて気持ちが浮かんでくる。

「どこの店行く？カラ館でいい？」





「どこでもいいですよ。先輩の知ってるところでいいです。」

美香は、大人になっていた。

話し方は、昔のままのようだが、しぐさや表情が明らかに昔と違う。

ぼくは、美香と話しながらドキドキしていた。

新宿は眠らない街というけれど、本当にそうだ。こんな時間なのに人がたくさん歩いている。

それに、ホストが客引きをしたりしている。美香を見失いそうだ。

「先輩・・・？」

美香は、少し驚いたようだが抵抗はなかった。

しかし、彼女の身体が硬直したのを感じた。

僕は美香の手を握ったのだ。

僕は半ば強引に、新宿の人ごみの中彼女の手をひっぱって進んだ

今は、みさとのことも、仕事のこともどうでもよかった。

美香といるこのひとときを大事にしたいと思った。

終